

2025年1月19日

年間第2主日

菊地 功 枢機卿 メッセージ

ヨハネ福音に記されたカナの婚姻の奇跡物語は、イエスの最初の奇跡とされています。母マリアとともに招かれたカナの婚姻の席で、用意されたぶどう酒が尽きたときに、母の願いに応じて、水をぶどう酒に変えたという奇跡物語です。

現代社会での披露宴などの婚姻の宴が、どのように捉えられているのかは、一概に言うことはできないのですが、聖書では、しばしば神の救いや神の支配の実現するときの喜びを表現するために用いられています。

すなわち神の救いや神の支配が実現したときには、そこにはあふれんばかりの喜びがあり、その喜びが満ちあふれる希望を生み出す。それが婚姻の宴における喜びと希望に例えられています。その喜びの源であるぶどう酒がなくなったとき、そこに神は奇跡を持ってあふれんばかりにぶどう酒を与えたのですから、福音はイエスこそが救いの喜びの源であることを、この奇跡から教えようとしています。単に、イエスが水をぶどう酒に変える力を持っていることを称えたいのではなく、そこに示される意味を説き明かそうとしています。

さらにこのカナの婚姻では、イエスは行動を促す聖母に対して、「わたしの時はまだ来ていません」と答えています。すべての出来事には神ご自身が定めた「時」がありますが、それを換えさせ神の行動を引き出したのは、聖母マリアの信仰とそれに基づく確信です。カナの婚姻の出来事に、わたしたちは、聖母マリアの取次の力と、神の救いの喜びと希望に寄与する聖母の存在の重要さを見出します。わたしたちが聖母に祈るのは、聖母自身を礼拝しているのではなく、聖母を通してこそ主イエスに導かれるからであり、聖母マリアはそれほどまでに神からの信頼を得ている存在として、わたしたちが崇敬し尊敬すべき模範であります。

教会は、1月18日から25日までを、キリスト教一致祈祷週間と定めています。今年のテ

ーマは、ヨハネ福音からとられた「あなたは このことを信じますか」(ヨハネ11・26)とされています。

第二バチカン公会議のエキュメニズムに関する教令は、「あたかもキリスト自身が分裂しているかのような(現状は)・・・明らかにキリストの意志に反し、また世にとってはつまずきで」あると指摘し、福音を告げ知らせるためにもキリスト教における一致の重要性が示されています。それは単純に組織を合同することではなく、それぞれのカリスマを生きながらともに歩む一致です。

今年2025年は、コンスタンチノーブル近郊のニケアで最初の公会議が開かれてから1700年目にあたります。まさしくキリスト者に共通の信仰を振り返るときです。わたしたちがミサの時にともに唱えているニケア・コンスタンチノーブル信条は、325年のこの公会議と381年のコンスタンチノーブル公会議を経て成立した信条で、キリスト教の多くの教派で信条とされています。

ニケア公会議を記念するこの年、キリスト教祈祷一致週間は、信じることの意味、さらに「わたしは信じます」と「わたしたちは信じます」という、個人または共同体としての信仰をあらためて確認する機会となります。

信仰における一致のうちに歩みをともにして参りましょう。